
ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

睦城矢刺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

【Nコード】

N4954Y

【作者名】

睦城矢刺

【あらすじ】

その名の通り、本来は交わる事など決していない平行世界。しかし、もし2つの世界が交差する事があればそれは、まさしく奇跡。そしてその奇跡はいつたい、2つの世界にどんの影響を及ぼすのか、誰もわからない。だがそれでも、彼等は、そして彼女等は戦い続ける。2つの世界を守る為に

架空戦記『ストライクウィッチーズ』と異世界の戦士（軍人）達との奇跡のコラボ作品です。それではどうぞ！！

序（前書き）

新しく書き始めた筆者の妄想、もとい新作です。プロローグには長い下々多いので、誤字脱字も多いかもしれませんが、どうか楽しんでください！

序

平行世界は、決して交わることはない。

その名の通り、お互いを平行戦場に進むからだ。

しかし、もしその定理が崩れ、交わる様な事はあるのか？

もしあるとすればそれは、何億、何十億、何百億分の一という、まさしく『奇跡』と言っても過言ではない事だ。

これはそんな『奇跡』の一つなのかもしれない

ストライクウィッチ

イズ 奇跡の交差

? Side

寒風吹きすさむ12月の初め。

暗い雲が敷き詰められた夕方の空が、電飾をともした木々が並び、クリスマスソングが絶え間なく流れ、多くの人々が忙しなく動き回る街の上にグッタリとのしかかり、何とも言えない息苦しさを感じる。

そんな暗く、鉛色に染まったの空を、2つの『刃』が、轟音と共に切り裂いていく。

片方を前に、片方を後にして、真っ直ぐに延びる白煙と獣の唸り声の様な轟音と共に空を行くソレからは猛禽の様な程の猛々しさを感ずる。

こちら隊長機、あと5分でポイントの空域だ。気を引き締めていけ

後に行くF-15J戦闘機、通称『イーグル』に乗り込んでいる俺こと、日本国防空軍第205飛行隊所属、シンザキカスト臣崎和人二等空尉は、俺の先頭に行く飛行隊長の東間《アズマ》三等空佐からの無線連絡に耳を傾けていた。

了解しました

俺は隊長からの無線連絡に簡単な返事だけを返す。正直、あまり長話出来るような余裕はなかったからだ。空軍の戦闘機乗りを目指す、航空学生課程に入って早8年、自分の身に初めてかかったスクランブルの命令。緊張するなと言う方が無理だ。

そう固くなるなよ、臣崎

緊張している事がバレたのか、隊長から再び無線が入る。

気楽にいけよ、気楽に

そんなこと言われたって、自分は体調みたいに場馴れしているわけじゃないんですよ

方や、国防空軍の前身たる航空自衛隊時代からの実戦経験を持ち、28歳という異例の若さで三佐に昇進したベテランファイター。方や、士官になって2年目、しかも実戦経験全くなしの新米ファイター。比べる事すらバカらしくなってくる組み合わせである。

俺はそんなんじゃないやねえよ。それに、そんなネガティブ思考じゃアツという間にやられちまうぞ

不吉なこと言わないで下さいよ

ハハツ、すまんすまん。ちょっとした冗談だ

冗談つて、この状況で言われるともものすごい不安になるのでシャレになりませんよ。マジで。

そんなコントじみた会話をしていると、気が付けばもう市街地を抜けて冬の凍てつく海の上を飛んでいた。備え付けのレーダーを見ると今回のスクランブルの原因となった『敵』の反応がモニターされている。接触まであと2分といったところか。

国防空軍第205飛行隊がスクランブル命令を受けたのは殆どの兵士が帰り支度を始める17時頃のことだった。空軍のレーダーが日本領空内に現れた『謎の飛行物体』を見つけたのが始まりだった。

太平洋に突如として現れた『ソレ』は一切の無線による領空からの退去命令を無視、その上、空軍が飛ばした偵察機を撃墜し関東方面に向かって飛んでいるとのことだった。

国防省は偵察機撃墜の事を知った後に、この飛行物体を『領空侵犯したうえに友軍機を撃墜した敵』として空軍に拿捕、もしくは撃

墜を命令した。俺達が受けたスクランブルもソレだ。

そんなわけで俺達がこうして飛んでいる訳だけど、今回のスクランブルでは俺が新米であること以外にも不安要素がある。

それは、『飛行物体』の正体が依然として不明である事だ。

何故なら、撃墜された偵察機からの映像が、何の理由か全く無かったからなのだ。

普通それだけならカメラの故障という事だけで納得がいくが、もう一つ、不安要素がある。それは偵察機を撃墜したのはレーザーらしきものであるという事だ。

これは撃墜された偵察機のパイロットからの最後の通信でわかった事なのだが、レーザー兵器などまだこの国も保有しておらず、基礎すら形になっていない。ゆえに、今俺達が接触しようとしている相手は『未知のレーザー技術を持った謎の飛行物体』という事になり、現場にいる俺達としては不安で仕方がない。現に隊長も、『敵』の正体が不明であり、何の情報もないという事を司令から聞いた時にはつきりと顔をこわばらせたほどだ。

見えたぞ

不意に、隊長から真剣な声で『敵』との接触を知らせる無線通信が入る。俺は『敵』との接触到に身体が震えだす。『死ぬかもしれない』という恐怖心が身体の奥からどんどん湧きあがってくる。そして俺はバイザー越しに、雲の切れ目からスウツと現れた『敵』の姿

を見て、息をのんだ。

「……………な、なんだよ。アレ」

声が震えているのが自分でもわかる。それほどまでに『敵』の姿は異様過ぎた。今頃は体調も、ライトニングに備え付けられたカメラ越しに状況を傍観している軍幹部達もおそらく同じ反応を示すだろう。

ステルス爆撃機のような三角形の形。黒く染まった機体^{カラダ}。パズルのような六角形の斑点。

空を飛ぶには必要不可欠な推進気もプロペラもつけずに、まるで滑る様にして空を飛ぶ『敵』は、とても禍々しく、不気味だった。

序（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。ついでに、筆者が別に連載している『IS 日輪の乙女達』も、よろしければご覧になつたください。

それでは！

第一話（前書き）

たぶん週一の更新となると思いますが、まあ、気楽に更新を待っていて絵くください。更新しないなんてことはないのです。ぜひ見捨てないでください。

そんなこんなで第一話です。ではどうぞ!!

第一話

和人 Side

司令部からのスクランブル命令に従い『敵』のいる空域に赴いた俺達が見たのは、機械とも、生物とも見分けがつかない。正しくアンノウンとも言うべき異形の塊だった。

なんだありや……………？

隊長も、まるで未開のジャングルの奥地で珍種の生命体に会った探検家の様な又けた声を漏らす。

エイリアンの襲来かなにかかよ

確かにそう思えますけど、まだそう決まったわけじゃ……………

いやそうだけどさ……………、とりあえず旋回して様子を窺うぞ。迂闊に発砲するなよ

了解しました。旋回行動に移ります

隊長の後に続き『敵』の周りをゆっくりと旋回する。最初の内は何時攻撃が来るのかとビクついていたが『敵』は俺達にもくれず真っ直ぐに日本本土に向かって飛び続けている。まるで俺達など眼中にないと言われているようで腹が立つが、大人しくしていてくれるのに越したことはない。上手くいけば拿捕出来るかもしれない。

が、その考えは甘かった。

旋回が半周終わろうとした時、何の前触れもなく『敵』がビームを撃って来たからだ！

「……………っ！」

俺は間一髪、操縦桿を前に倒してそれを避ける。急なGを受けながら、急降下して回避した直後、俺が居た場所を赤いビームが過ぎ去る。少しでも判断が遅ければ俺は今頃、機体もろともスクラップになって海の藻屑と化していただろう。

あつぶねえっ！

ヘルメットに接続された無線から隊長のうめき声が聞こえてくるが、俺は機体のバランスを安定させる事に精一杯で気にかける余裕がなかった。

『敵』からのビーム攻撃は続き、反撃どころか接近の隙すら見せない。

クソッ、撤退だ！

りよ、了解！

命令に従い、操縦桿を操作して隊長の後を追う。

。 無数のビームを同時攻撃してくる、ステルス機以上に巨大な『敵』。二機の戦闘機ではとても対処しきれない。拿捕や撃墜なんて出来

っこない。

エンジンをフルスロットルさせて空域より離脱する。『敵』は追撃しようと向かってくるが足は速くないらしくどんどん距離を開いていく。やがて『敵』の攻撃の照準もどんどん疎らになってきた。

(助かった……………)

攻撃と死の恐怖から解放された反動で、両の肺の溜った重い空気を吐き出す。その時だった。

一瞬、前方の雲の切れ目から『黒い影』がチラツと見えた。

「な……………っ！」

『敵』だ！ と本能的に直感して俺はすぐに僚機へ無線を入れる。

前方っ、『敵』の僚機らしき機影を確認！ 数、1！

なにっ！？

その直後だった、先の『敵』よりもはるかに小さい 恐らくはセスナ並み 『敵』は、こちらとの距離を詰めながら全く同じビームを撃ってくる。

もう一機いたのかよっ！

隊長はそう吐き捨てながら主翼に付けられた90式空対空誘導弾

短距離ミサイル

を一発、新たに表れた『敵』に向かって撃つ。白煙と共に撃ち放たれたソレは、まるで吸い込まれるようにして『敵』に直撃する。

白い、結晶の様な破片となって砕け散る『敵』を見て呆気なく感じたが、その思考は瞬間的に途切れる。

『敵』を撃墜した際に膨れ上がった黒煙、その中から一条のビームが、真つ直ぐと俺に向かって放たれたからだ！

「……………っ！」

迫りくる死の恐怖に俺は何もできない。体が硬直し、操縦桿を動かすことさえできない。そんな俺が今できるのは死の恐怖に耐える為に両目を固く閉じて歯を食いしばる事だけだった。

……………っ！

無電越しで隊長が何か叫んでいるがよく聞こえなかった。そして俺は訳も分からずに死を覚悟する。

……………痛みが来ない……………死んだのか……………？

死の痛みが何時まで経ってもやってこないのを不思議に感じ、恐る恐る目を開ける。

そこには本来、俺と機体をスクラップに変えるビームが視界いっぱいに広がっているはずだった。

しかしそこには、誰もがまるで想像もしなかったような光景が広がっていた。

「な……っ!？」

俺はのの光景に絶句した。

目を開けてまず目に付いたのは人の背中だった。

純白のセーラー服を着、シルバークレーでカラーリングされた金属の筒の様なものを両足に履き、手に旧式の機関銃を持ち、何のふざけなのか、犬の耳と尻尾を付けた、とても幼い、人の背中だった。

俺はその光景が信じられなかった。パイロットスーツや酸素マスクを着けずにこんな高度で人が活動できるなんてありえない。浮力だって、足に付けた見慣れない機械の先端に付いている、小さなプロペラのみだ。

そして何より信じられないのが、俺の命を奪うはずだったビームを防いだという事だった。

円形に広がる、青く光る盾の様なもの。この背中はそれを自分の目の前にかざしてビームを防いでいたのだ。

大丈夫ですか!？

ふと、隊長のモノでもない、まだ幼い少女の声が耳に入ってくる。無線に割り込んだのか、その声には弱冠ノイズがかかっていた。

「キミは……？」

この声が、自分の命を救った人の声であることを直感した俺は呻く様に声を出す。

少女は、俺の声に応えるようにして、こちらに振り向く。

薄茶色のクセのかかったショートヘアに、幼さを十分に残した顔つきは、小柄な体つきと相まって小動物の様な愛らしさがある。だがその瞳からは、果ての無い、強い意志の様なものが感じられる。

そんな彼女は、俺が無事であることを見るとニッコリと年相応の笑顔を浮かべ、国防海軍でしている様な敬礼を向けて言った。

わたしは宮藤芳佳^{ミヤフジヨシカ}。連合軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』所属のウィッチ。一飛曹です！

そう言って彼女は、宮藤芳佳は自己紹介をした。本来ならここで俺も自己紹介をすべきなのかもしれないが、生憎と俺の脳はショート寸前でそんな余裕なんてなかった。

ただ一つ言える事がある。それはこれが、俺と彼女の、奇跡の様な出会いとなつた事だった。

第一話（後書き）

どうでしたか？

我ながら最近病気なんじゃないかと思う様な内容ですが、それに表現も滅茶苦茶ですが！ まあ、その点は感想を書きついでにアドバースをください。

ではまた！！

第二話（前書き）

更新遅れてしまいました。先週学校の期末試験で書く暇がありませんでした。申し訳ありませんでした。

相変わらずの駄文ですが、楽しんでいってください。ではどうぞ
！！

第二話

和人 Side

『ウィッチ』、だと……？

ヘッドホン越しからの隊長の声が右から左へ抜けていく。俺の目の前にいる『ウィッチ』と名乗る少女、宮藤芳佳の存在に思考が停止していたからだ。

『ウィッチ』とは、西洋の魔女を示す英単語の事だが、そんなファンタジーな存在があるなんて到底信じられない。しかし現に今、彼女は両手にシールドを展開して俺を守った。レーザー兵器と同じく基礎すらも出来上がっていない代物で、だ。それに、生身の人間がこんな高度で、酸素マスクも耐Gスーツも着ていない軽装状態で活動できるのも、彼女が魔女だと信じ切ってしまうえば納得できる事だ。

それに第一、『501』などという部隊は国防空軍どころか、陸軍や海軍の航空部隊には存在しない。彼女が持っている装備もそうで、足に履いている金属の長靴の様なモノや、手に軽々と持っている旧式の軽機関銃、そしてなにより、彼女の身体から生えている犬耳と尻尾は、時々ピクピクと動いて、どう見ても作りものとは思えない。

「君は一体……」

そう呟いた時だった。今まで沈黙していた『敵』が、俺と少女を掠める様にビームを撃って来た。

「危ね……っ!？」

意識を戦闘に戻された俺は上昇して回避する。隊長も同様に上昇して回避するが、そこに先程の少女の姿はなかった。

「逃げ遅れたか!？」

シールドを展開できるとはいえ、あんな形で攻撃を食らっては反応しきれない。最悪の事態を想像し急いで彼女の姿を探した。

「……………いた」

必死に首を回して探していると、先程俺が居た場所に彼女はいた。傍目から見ても無傷なのを見ると寸でのところでシールドを展開したか、かわしたのだろうか。

しかし安堵の息を漏らしたのもつかの間、俺は少女の行動に絶句した。手に持った軽機関銃を構え、一直線に敵に突っ込んでいったからだ！

「馬鹿やめろっ！ 死ぬ気かっ!？」

俺はあまりの衝撃に無線越しに怒鳴った。しかし少女から返って来たのは、希望を感じられる、少女特有の明るい声だった。

「だいじょうぶです！ ウィッチに不可能はありません!！」

『敵』から放たれる無数のビームをかいくくりながらも少女は手に持つ機関銃から、ダダダダッ、と音を立てて弾を連続して撃ち放ち、『敵』を粉碎する。。

「すげえ……」

少女の手際の良さに俺は感嘆の息を漏らす。その動きは何度もあの『敵』と戦ってきた者のソレだ。

といつても、まだ安心はできないぞ臣崎

呆然としていた俺は隊長から又無線で『敵』がもう一体いるのを思い出した。機首を傾けると先よりも何倍も巨大な『敵』が間近に迫ってきているのが見える。

嬢ちゃん。君、あのバケモノの名前と具体的な弱点を知ってるのか？

不意に隊長が少女に対して質問する。少女は弱冠戸惑いながらも空に答える。

え、あ、はい。あれは『ネウロイ』というもので、体内に埋め込まれている『コア』を壊す事が出来れば倒せます。でも壊さない限りはいくら攻撃を加えても再生してしまうんです

成程ね。弱点が分つちまえば簡単な事か

隊長の声は、アドレナリンが出ているのか、それとも武者震いか、弾んでいるものの微かに震えてもいた。確かに、敵の弱点が分つてしまえばこちらが持つ恐怖心は軽くなるし、いくらでも反撃のしようがある。

行くぞ。 臣崎

了解！

命令に反する必要などなかった。一気にスロットルを全開にし、隊長の後に続く様にして、『敵』の直上に行くように緩やかに上昇する。

ちょっと待ってください！ 危ないです！！

こちらが『敵』に仕掛けようとしているのが分つたのか、少女は悲痛な声で俺達を止めようとこちらに向かって飛んでくるが、最高マツハ2.5まで出せるF-15Jに対して、プロペラを使っているレジプロ の様なものが追いつける訳もなく、距離はどんどん開いていく。

ヤツの上で一気に降下して短距離ミサイルを撃ち込む。しっかりとついてこいよ

わかりました！

隊長の言われた通り、ビームをかわしつつ上昇し一気に降下する。

「くっ………！」

急激にかかったGに耐えつつミサイルの発射ボタンに指を添える。敵との距離はどんどん縮み恐怖心から機首を上げないように両手に力を込める。

今だ、発射！

隊長の号令と共にボタンを押す。2機の主翼から切り離された短距離ミサイルは2条の白煙を引きながら『敵』に向かって進んでいく。俺達が機首を上げて再上昇し敵との衝突を避けた瞬間、後ろでドオンツ！ という耳を突くような強烈な爆音と振動が機体と身体を揺らした。

やったぞ撃墜だ！

身体にかけたGと衝撃でしばし茫然としていた俺だが、隊長の喜々とした声で『敵』を撃墜した事を理解した。こつもあつさりと倒せると『敵』に異常なまでの恐怖心を抱いていた自分が馬鹿らしくなってくるな。ホントに。

「そう言えば、あの子は」

先程引き離した少女の事が頭を過ぎり首を回して彼女を探す。が、そんなに慌てることはなかった。

不意に人が他の影がかかり斜め上を見ると先程の少女が防風用の窓ガラスをノックしていた。

あの子 すいません

あ、はい

あまりにも唐突な事に間の抜けた返答をしてしまう。少女は俺を興味深そうにジツと見つめていた。少女の大きく、くりつとした瞳に見つめられ、俺はまるで金縛りにあったように固まってしまふ。しばらくたって少女は口を開く。

あなた方つて扶桑人ですか？ 見たことない飛行機に乗ってますけど

は？ 扶桑人？ 俺達は日本人だぞ

え、でもその言葉つてどう考えても扶桑の言葉じゃ？ それに他の皆はどこに……

ちよつといいかなお2人さん？

訳のわからない押し問答をしていたところに隊長の声が割って入る。

嬢ちゃん、悪いが君にいろいろと聞きたい事がある。俺達と一緒に基地まで来てくれないか？

え？ でも私は……

悪いが俺達は嬢ちゃんに対して手荒な手段を使いたくないんだ。だから大人しく付いてきてくん無いか？ 決して悪い様にはしないから

隊長の判断は最もだろう。『敵』の撃墜を共闘したとはいえ、彼女が俺達の味方だと決まったわけではない。だが敵とも言い切れないこの状況では見逃すことは出来ないのだ。

……はい、分かりました

少女は何か言いたげだったが了承してくれた。俺は了承してくれなかったときはどうしようかと不安だったが、ひとまず安心だ。

その後俺と隊長は謎の少女を左右から挟む形で基地に向かって飛んでいた。少女は今のところ何の抵抗も見せずに大人しくしていたが、市街の上空を飛び、基地が近くなっただところで少女に異変が起きた。

え、ウソツ……!?

どうした!?

ま、魔法力がもう……!

見ると、少女が履いている機械のプロペラの回転が、丸で燃料切れ寸前のプロペラエンジンの世に弱くなっている。

まさか、燃料切れか!?

基地が近くなり、高度を下げ始めているとはいえ地上との差はとてつもない。この高さから生身の人間が落ちればどうなるのか、想像もしたくなかった。隊長も、焦った声を上げる。

まだ基地まで距離あるぞ！ 何とかもたせろ！

そ、そんなこと言われたって！ う、うわっ……!!

ああっ……!

願いもむなしく、プロペラの回転は弱まっていき、少女はハンググライダーのように失速し、情けない悲鳴を上げながら地上に落ちていった。

.....

不気味な沈黙。サーツと顔から血の気が引いて行くのがやけにはつきりと分った。

.....た、隊長.....

.....だ、大丈夫だろ.....。あの落下速度なら、上手くすれば無事着陸できるさ。ハハハ.....

笑いがやけに引きつっているのは追及しないでおこう。

と、とにかくだ。今の俺たちじゃ何もできないから、一端基地に戻ろう。報告して、警察とかに応援を要請すればみつかるとだろ。.....たぶん

そ、そうですね、大丈夫ですよ。.....たぶん

.....

アハハハハハハ.....

俺は墜落していった少女が無事であることを祈りつつ基地へと向かった。

第二話（後書き）

今回でネウロイとの戦闘は終了です。次回からは和人と芳佳が出会うようです。墜落した芳佳がどうなったのかも楽しみにしてください。

ご意見・ご感想お待ちしております。ではまた！！

第三話（前書き）

更新が遅くなったすいません。とりあえずやる気はあるので暖かく見守っていただきます。だはどうぞー！

第三話

宮藤 Side

異変が起きたのはほんの数時間前だった。

私達、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズはいつも通り、アドリア海に現れたネウロイと戦っていた。

大型が一機、中型が三機、小型が五機と少ない数で三機の円盤型のネウロイが混ざっていた。

ミーナ隊長はそのネウロイが基地を、もしくはロマーニヤの街攻撃するための物かもしれないと言っていたし、頑張らないといけないよね。

そして挑んだネウロイとの戦い。坂本さんの指示の下で、そしてリーネちゃん達と戦ったおかげでネウロイの殆どを撃ち落とす事が出来た。

そんな中、円盤型の一つが攻撃をかいくぐって逃げ出すのが見えた。

「逃がさない！」

私はすぐにそのネウロイを撃ち落とす為の後を追った。

距離を詰めて、機関銃の引き金を引く。

何故か攻撃をしてこなかったそのネウロイを、私はあつという間に撃ち落とす事が出来た。

この時私は、ネウロイを撃ち落とす事が出来た事がうれしくて思わず気を抜いてしまっていた。だから、

あのネウロイが突然爆発したことに反応が遅れてしまった。

たぶん、ネウロイが持っていた爆弾が爆発してしまったんだろうけど、私はそんなことも考えられなかった。

爆風に巻き込まれて、耳のインカムから聞こえてくる皆の音が、とても遠く聞こえた。

和人 Side

腕に付けた安物のアナログ時計が丁度20時を示す頃。辺りはすっかり暗くなり冷たい風が吹きすさんでいる。基地近くにある官舎に住んでいる俺はそんな中を、風の流れに逆らいながら自転車をこいで自分の住処に向かっていった。ジャケットの上にマフラーを巻いてはいるが、12月の寒風はそんなことお構いなしに服の中に入り込んでくる。

「ふう……………」

官舎に着き、電灯の光で照らされた駐輪場に自転車を停めて星一

つない都会の夜空を見上げて一息つく。

(あの子、どうしたのかな)

あの時、死ぬはずだった自分を助けてくれたあの少女の事を思い出す。期間途中で全量不足(?)で墜落して行った彼女は、俺達が基地に戻りこの事を報告した後すぐに捜索が始まった。『ウィッチ』と呼ばれる謎の存在に空軍上層部はだいぶ混乱しているようで、少女の捜索には警務隊や基地警備隊、地元警察による大規模な捜索が行われているが未だに発見には至っていない。

俺も最初は捜索に加わっていたのだが、隊長から「後の事は俺がやるからお前は帰って休んどけ」と言われたので今こうしているわけなのだが、やはりあの少女、宮藤芳佳の事が頭から離れないのだ。

「無事だといいいけどな……………」

そんな事を呟きつつ鍵を開けて自分に割り当てられた部屋の中に入り電気をつけ、玄関を上がりマフラーをほどきながら明かりをつけた洋間に入る。

俺の生活空間であるとともに寝室でもあるこの部屋には、木目調のテレビ台に置かれた小さな液晶テレビと本棚、机などと共に、ソファー代わりに使っているシングルベッドがある。

官舎としては狭い部類に入るのだろうけど、少し小さめのカウンターキッチンがある事も含めて、1人暮らしの俺にとっては困る事のない広さだ。

エアコンをつけて、背負っていたリュックサックを床の上に下ろしベッドの上に脱いだジャケットとマフラーを放り投げて早々に夕食の準備を始める為に台所に入る。準備といっても、昨日作ったカ

レーの残りをあつためるだけなのだが、カレーは一晚漬けておくと言くなるって言うし、これは断じて、断じて！夕飯作るのめんどくさいと思つたわけではないのだ。

……たぶん……。

「でも二日続けてカレーだけってのはな」

何か追加で一品欲しいところだ。

「……あ、そうだ」

タッパに入れて保存しておいた白米をレンジに入れたところで、先週実家から冬野菜が大量に送られてきた事を思い出した。

「冬野菜サラダでも作るかな」

サラダならただ野菜を刻んで盛り付けるだけだから簡単に作れる。

そうと決めたら即実行。段ボールに入れたままにして置いてあるベランダに向かう。これは余りにも野菜が多過ぎて冷蔵庫に入らなかつたのでこうしているのだが、時々曇が降ってくるような今日の頃、天然の冷蔵庫と化したあのベランダに置いておいて野菜が痛むことはまず無いだろう。

正直言つて再び外の冷気を感じるのはゴメンこうむりたかつたが、ベランダの戸を開けない限り俺が冬野菜にたどり着くことは出来ない。ここはひとつ、覚悟を決めるしかない。

「……………よしっ」

覚悟を決め、ベランダの戸をゆっくりと開けて外に出た俺は外の冷気に体が震えて、そしてベランダにあるものを見て……………思考が停止した。

べつに冬野菜が入った段ボールを見てそうだったわけではない。それとは別の、本来ではありえない様な光景が俺の足元に広がっていたからだ。

人。いや正確には少女が倒れていたからだ。

別に俺に妄想癖があるとか頭のネジがぶっ飛んでるという訳ではないよね？

「……………イタタタッ！」

ためしに自分の頬を思いっきり抓って見るとやはり痛みを感じた。夕チの悪い夢とかそういうのでは無いらしい。

それに、

「この子って」

意識を失った倒れているその少女に俺は見覚えがあった。それはもう嫌というほどに。

幼い顔立ち、水兵の様な白いセーラー服、手に持った旧式の機関銃、足に付けた妙な飛行機械、そして何故かパンツ　らしきモノ丸出しのその姿はつい数時間前、『敵』からの攻撃から俺を守ってくれた『ウィッチ』と名乗る謎の少女、宮藤芳佳のものだった。

「……………なんでぞ」

あまりの事に某運命ゲームの主人公の台詞を言ってしまった俺は悪くないと思う。

東間 Side

今の時間はほぼ無人に等しい、基地内の喫煙室。そんなところで俺ごと、国防空軍二等空佐東間滋アスマンゲルはのんびりと煙草を吸っていた。

「……………はあ」

否。正確には煙草を吸いながら溜息をついていた。

「全く臣崎の奴。どうしてこうも俺の頭痛の種を拾ってくるのかね？」

今しがた頭痛薬を飲んだばかりで痛みが抜けていない頭を右手で抱える。

それは基地に帰還した後1人早めに帰宅させた部下、臣崎和人二尉からの電話によるものだった。

あの戦闘の上級指揮官であり、また部隊長として報告書等の雑事に追われていた俺は突然の部下からの電話に別段と驚きはしなかった。……その内容を聞く前は、だが。

その電話はなんと、現在空軍が血眼になった探している宮藤芳佳を発見したというものだった！

しかも、自宅の官舎のベランダで倒れているのを発見したと聞いて俺は身体力が抜けていく思いだった。なぜなら捜索隊は、官舎から数キロと離れた宮藤芳佳の落下地点の周りを重点的に搜索していたからだ。道理で見つからなかったわけだ。また幸いにも宮藤芳佳は気絶しているだけで目立った外傷等はないとの事らしかった。

俺はすぐにこの事を基地司令の上村空将^{ウエムラ}に報告した。上村空将は高卒の二等空士として入隊してから叩き上げで空将まで上り詰めた人物で基地隊員からの信頼は厚かった。

俺はてつきり即自的な身柄の確保を命令されると思っていたが、空将の下した命令は「様子見」との事だった。なんでも彼女が目を覚まし状況を判断するまでは臣崎に身柄を預けておくという判断しかかった。といっても見張りは付けるらしく既に警務隊と基地警備隊の一部を官舎の付近に向かわせたらしい。

この命令に反対する幹部もいたが、それは空将が「女の子相手に強引すぎる手段を使うのは軍人として以前に男としていかんだらう」と、説得だか何だかわからない話し合いでけりがついた。

「とにかくだ。その宮藤とかいう嬢ちゃんが『敵』の撃墜に協力してくれたんなら、俺達の敵である可能性は低い。それにもしその子が敵だったとしてもウチの部隊を送るんだから心配する必要はない

た」

相変わらず、何の根拠もない楽天主張だが、暗に自分の部下を信頼している事は良く分った。これも基地隊員達が空将に絶大な信頼を置く理由の一つなのだが。

その事を電話で臣崎に伝えると、まるでこの世の終わりの様な声で呻いていた。まあある意味でいろんな責任が自分の肩にのしかかっているようなもんだからな。アイツの上官である俺も人の事を言えたもんじゃないが、哀れ以外の何物でもないな。

「さてさて。これからどうなる事やら……………」

煙草を啜え、肺一杯にニコチンとタールを吸い込んだ俺の呟きは、そのまま吐き出した煙と共に暗闇に消えていった。

第三話（後書き）

相変わらずの駄文で申し訳ありません。自分なりに頑張っているつもりなんですけどもうまくいきません。

ご意見・ご感想等お待ちしております。ではまた!!

第四話（前書き）

なんか最近更新できる量が減ってきました。その上駄文とくればもう笑うしかありませんね。

そんなこんなで第四話です。ではどうぞ！！

第四話

和人 Side

(どうしてこうなった！？)

俺、日本国防空軍所属パイロット臣崎和人は今、自宅のカウンターキッチンで鍋に入ったカレーを温め直しながら、サラダを作る為に冬野菜を切っている。

此処までなら普通の、しがない独身男の料理風景だろう。

「くう〜〜〜……………」

ベットの上で可愛らしい寝息を立てながら寝ている女の子が居る事を除けば。だが。

つい先まで俺の自宅である官舎のベランダに墜落(?)していた上気絶していた少女、宮藤芳佳。現在進行形で空軍上層部から数時間前の空戦についての重要参考人として指名手配されており、空軍や警察が血眼になって探しているのだが、まさか空軍の官舎に墜ちているとは思ってもみなかっただろうな。

あの子を発見した後、彼女を寒いベランダに放置しておくわけにもいかなかったので、取り合えず装備ごと部屋の中に運び込んだ。

ただ、あまりにも重かったので機関銃と妙な飛行機械は外して下はやっぱり履いてなかった。部屋の中に運び込んで、ただ気絶しているだけだったのでベッドに寝かせて毛布を掛けたのだ。

ちなみに。運び込む際にお姫様だっこみたいな状態になったりしたのだが。その時宮藤芳佳の身体が羽みために軽かったとかマシユマロみたいにかわかったとか柑橘系の甘いにおいがしたとか。……… けっして、けっして！ そ、そんな事は考えていないんだからな！

もちろんこの事はいち早く上官である東間三佐に連絡した。てつきり直に身柄を基地に運ぶか、警務隊が回収に来るまで身柄を拘留するような命令を受けるんだと思っていたんだけど。基地司令の上村空将達上層部が下した命令は、なんと「様子見」。この子が目を覚まして落ち着くまで面倒見てるとの事だった。

不用心というか、大胆というか。流石は戦国再来の豪傑と称される上村空将閣下といったところだろうか。

でも不必要に警戒するのもアレだろうと、あどけない、年相応の可愛らしい寝顔でぐっすり眠っている宮藤芳佳を見る。警戒心を全く感じないその寝顔を見ると、なんだか彼女が俺達の敵なんかじゃないと思ってしまう。

ちなみに俺の拳銃、スミス&ウエッソン社製のM10回転式拳銃は今机の引き出し 鍵付き の中に入れてある。自衛隊が国防軍に昇格し自衛官が軍人になってからは、軍人や警察官等の特別職公務員に対する拳銃の販売が国内で解禁となり、私物の拳銃を購入して職務で使用する軍人や警察官が増えた。

俺のM10は、なんでもベトナム戦争期に自動式拳銃を嫌った多くの米軍のパイロットが私物として使っていたものらしいのだが、拳銃にそれほど詳しくない俺はただこの拳銃を士官学校の同期の親

友に勧められた買ったに過ぎない。

本来なら、敵か味方かわからない者を監視する際は拳銃を肌身離さず携行しておくものだろう。しかし、そんな必要はないんじゃないかと思っただ。

根も葉もない勘だけど、彼女の寝顔を見ていると本当にそう思ってしまうから不思議だ。いや、万が一の際、こんな女の子に拳銃を向けたくないだけなのかもしれないんだけど。

「……………とにかく飯にするか」

腹が減っては戦は出来ないと申すし、それに彼女が目覚めたときに何かおいしいものを食べてもらいたいとも思うしな。早俺は速力レーとサラダを盛り付ける為に2人分の皿を食器棚から出した。

宮藤 Side

暖かなぬくもりの様なものに包まっていると、遠くから、カチャ、カチャ、と食器のこすれる音が聞こえてくる。

漂ってくる香辛料の香りが鼻をくすぐり、半分寝ていた意識を引っ張り起こされる。どうやら私は寝かされているらしい。毛布がかけられ、寝かされているのは感触から見てベッドか何かだろうか。

薄目を開けて最初に目に入ったのは天井。一点の曇りもない白い

天井だった。

ここで私がつい先、魔法力不足でストライカーユニットが停止、墜落した事を思い出して、此処をどこかの病院の病室かと思い、寝ぼけつつも上体をベッドから起こして周りを見回す。少し狭い部屋の中には黒い板のような機械と机、本棚と卓袱台みたいなガラスのテーブルが置いてあって、どう見ても病室とか基地の中ではない、ただ民家のような。

「……………」

「あ……………」

「えっ？」

後ろから男の人の声が聞こえて来て振り向く。

そこには両手にカレーを盛り付けたお皿を持って固まっている、
だいたい20歳くらいの男の人がいた。

私たちはお互いの顔を見詰めたまま固まった。なんというか、男の人にこうも見つめられた事の無い私はどうしても緊張してしまう。蛇に睨まれた蛙というのかな。ちよつと違うか。

………どの位経っただろう。

時計の針がカチ、カチ、と動く音がやけに大きく聞こえる中で、先に口を開いたのは男の人だった。

「あ、あー」

「は、はい」

口の中はもう緊張でカラカラになり、まともに呂律も回らない。とにかく、男の人相手にこんなに緊張したのは初めてのことだった。

一方男の人はしばらく目を泳がせていたけど、一回深く深呼吸をして気を落ち着かせて再び目を開いた。

見開いたその人の瞳はさつきとは打って違って変って真剣に、真っ直ぐ私を射抜いてくる。私はその黒くてきれいな瞳に捉えられて顔がどうしようもなく熱くなって、思わず毛布を両手で手繰り寄せた。

（あ、あれ？ ど、どうしてこんなに胸がドキドキするの？ わたし、どうなっちゃったの？）

まるで何かをせかすように早くなる又根の鼓動に戸惑っていると、少しの間を開けてその人はゆっくりと口を開ける

「.....」
「食べる？」
.....
カレー

.....

「.....はい？」

私はしばらく、頭の中が真っ白になった。

第四話（後書き）

改めて思ったんですが、宮藤 Side書きづらいです。
ご意見・ご感想等お待ちしています。ではまた！！

第五話（前書き）

更新が少し遅れてしまいましたが、その分中身は詰まっています
！
∴ 駄文まみれですけど。ではどうぞー！！

第五話

和人 Side

テレビ台に置かれたデジタル時計が「20:45」と時間を表示する今、俺はさつき目が覚めた少女、宮藤芳佳と共にカレーとサラダという、ちょっと遅めの夕食を食べていた。だが……………、

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

.....

(き、気不味い……………！)

何が気不味いつて？ だって女の子と二人つきり………で食事なんて、彼女いない歴〃年齢の俺にはハードルが高すぎるんだって！ 男のロマンとか言った奴出てこい！

「あ、あの……………」

「ひゃ、ひゃいつ！？」

うがあああああああああああつっつっつ！！ 声が裏返つちまつたあああああつ！！ 声が裏返つち

「？……………、カ、カレーとサラダ、美味しかったです……………」

「え、あ、うん、お粗末さま……………。皿洗いに行くから」

「あ、手伝いますよ」

「いや、いいよ。ゆっくりしていて」

俺は宮藤からおずおずと差し出された皿を受け取り、丁度食べ終わった自分の皿と合わせてキッチンの流し台に置きに行く。簡単な話、一刻も早く似あの空間から逃げたかっただけなのだ。

チラツ、とカウンター越しに宮藤の姿を見ると、彼女は座布団代わりに使っているクッションにちょこんと座ったまま、いまだに状況を呑み込めていないのか微動だにしない。

それもそうだろう。目が覚めたと思ったなら見知らぬ部屋で寝かされていて、挙句にこれまた見知らぬ男の作った料理と一緒に食べたんだ。警戒されても可笑しくない。しかし彼女は俺の事を警戒するどころか、ただ単に今の状況に戸惑っているだけで俺に対しての警戒心や疑いは一切持っていないように見える。

（人を疑うという事を知らない程に純粹なのか、それとも信頼されているのか……………）

どっちにしる落ち着いているようだし、早めに彼女が何者なのか訊いておかないとな。そう思いながら、俺は皿を洗う為に水道の蛇口をひねった。

(なんなんだろう……?)

出されたカレーとサラダ 美味しくて自信をなくしかけた
を食べ終わって少し時間が経ったころ。私は部屋で一人考えていた。

見慣れない家具が揃えられた部屋に寝かされていた私は、この
家主みたいな男の人から出された食事を食べる。

……とてもじゃないけど、頭が追いつけない。

501の皆とも逸れちゃったし、さつき窓の外から街の風景を見
たけど、それは明らかにロマーニヤの街並みじゃなかったし、それ
に第一季節が全く違った。私たちが居たロマーニヤは夏だったけど、
ここではなんと冬なのだ。もうわけが分らない。でも、

(悪い人には見えないよなあ)

私をベッドに寝かせて毛布を掛けてくれた たぶん 上、料
理まで作ってくれた男の人。まだ名前は聞いてないけど、きっと悪
い人じゃないと思う。何か根拠がある訳じゃないけど、そう思えて
仕方がない。

「はい、お茶」

「あ、ありがとうございます」

「……………んじやね」

「はい？」

差し出されたお茶を少しずつすすする私の目の前に、ノートとペンを持った男の人だ座る。

「まず聞きたいんだけど、宮藤さん、キミ、俺の顔に見覚えない？」

「……………いえ、ありませんけど」

「そうか。……………まあ、バイザー越しじゃ顔見れなくて当たり前か。実は俺さ、数時間前にキミにネウロイとか言うやつからの攻撃から守られたんだけど」

「え？……………！ ああ！ あの時のパイロットさん！？」

「思い出してくれたか。あの時は助けってくれてありがとな。俺の名前は臣崎和人。日本国防空軍の二等空尉。いわば空軍中尉だ。よろしくな」

「いえ、いいですよそんな。私は宮藤芳佳です。芳佳って呼んでください」

「わかったよ、芳佳。俺の事も和人でいい」

そうやって男の人……………、和人さんはほほ笑んだ。……………笑った顔、カッコイイかも……………。

「？ 芳佳、どうした？」

……………はっ！

「い、いえ！ なんでもありません！」

「??？ そつか……………」

はづかうう。ひょっとして呆けてた顔見られたのかな。はずかしいよおお……………」

「ところでさ、芳佳」

「はい？」

恥ずかしさに顔を真っ赤にしていると和人さんが何か思い出したように私に聞いてきた。

「芳佳ってさ、何年にいたの？」

「え？ 昭和20年ですけど」

「……………本当、だよな？ 西暦だと1945年だけど」

「はい」

そう言うと和人さんは暫く、呆然としたような、それでいてどこか納得したような複雑な表情で何かを考えていた。

「やっぱりか……………いやまさか……………」

「あ、あの…。何かあったんですか？」

「……………芳香」

「は、はい!？」

なんだかとてもなく真剣な表情で私の事を見つめてくる和人さん。うわぁ、な、なんかまたドキドキしてきちゃった。

どこか躊躇いがちな和人さん。でもやがて意を決したように口を開く。

「真剣に聞いてほしい……………。今は2023年。つまり君たちの時代より78年未来の、いや、もしかしたら異世界かもしれないんだ」

「……………え？」

私は和人さんの言葉に、いろんな意味で啞然となった。

和人 Side

芳佳はもしかしたら過去の、いや異世界人かもしれない。

根も葉もない机上の空論なのかもしれないが、それを証明するも

のを彼女はたくさん持っていた。

彼女の格好と階級。セーラー服は世界中の海軍の水兵に限らず女子学生ですら切る様なマイナーな服装だが、彼女が名乗った自分の階級、「一飛曹」はおそらく旧日本海軍の飛行下士官の階級である。一等飛行兵曹の事じゃないのか？ それに今では国防軍の下士官は皆、海軍なら「海曹」、陸軍なら「陸曹」、空軍なら「空曹」という名称であり「兵曹」という名称は使っていない。

それ以前に、あの戦闘のさなか芳佳が妙な飛行機械で飛んでいた事や、身体から生えていた犬耳や尻尾や、俺や彼女の身を守ったシールド、彼女の所属する国家や部隊名などからおのずと考えられるだろう。

そしてその予想は当たったのだが、芳佳の口から語られた彼女の世界的内容には驚きまくりだった。

「え〜と。待って、色々整理させてくれ」

調書としてノートに書き込んだ内容を読み返してみると軽い頭痛を覚えるな。東間隊長がヘビースモーカーにはしつた理由が分るよ。すいません隊長、今まで隠れてニコチン臭いと悪口言ってますいません。

「で、芳佳の世界では魔女や魔法といったものが存在し、キミがはいていたストライカーユニットとか言うものでウィッチは空を飛ぶ事が出来ると。んで、人類は今、数十年前に世界各地に現れたネウロイとか言う訳のわからん敵に侵略されていて、芳佳はそんな連中から人々を守りたいか軍隊に入って戦っている。といことで合ってるな」

「はい。そう言う事です。…………でも私も信じられません。この世界が何十年も先の未来で、魔女やネウロイも存在せずに、その、人間同士で戦争をしているなんて…………」

そう言う芳佳の顔はちよつと悲しげだった。それは確かに、自分たちの世界ではいろんな国が力を合わせて戦っているのに、こつちの世界じゃ悲惨極まりない2度の世界大戦が起こり、今なおも国家間の戦闘や内戦が後を絶えないような有様だもんな。

「まゝ。とにかく今芳佳は俺が身柄を預かってる状態だから、そこんところは分つといてくれ」

「そう、ですか」

そう頷く芳香の顔は不安げだった。そりゃそうだろう。この世界では彼女の属する部隊や軍、そして国家は存在しない。何も頼れるものがない今では不安だけが積もるだろう。

「…………大丈夫だ」

俺はつい、そんな芳香の頭に手を載せてゆつくりと撫で始める。サラサラとしていてどこかい二オイがするその髪はやはりと思想の女の子の物だった。

「えっ、あの……………」

突然の事にあたふたする芳佳　小動物みたいで可愛かった
だが、彼女の不安げな表情を見ると、どうしてもほっとけなくて、何かしてあげなくちゃいけないと思えたのだ。

「大丈夫だって。何があっても俺がキミを守るから」

ただの見栄じゃない。俺は彼女を守りたい。本気でそう思っているんだ。

「……………はい」

見ると芳佳は、やはりいろいろと恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてコクンと頷く。そんな芳佳が可愛くてさらに長くなで続けてしまった。

「あ、ゴメン。嫌だったよな」

「い、いえ。そんなことないです。嬉しかったですし」

うわ~~~~！ 恥ずかし~~~~！ さっき言ってしまったセリフと
いい行動といい。嫌われなかった分だけまだましだけど！

「……………」

「……………」

何となくお互い恥ずかしくて暫く会話が出来なかったのは言ってもないだろう。

第五話（後書き）

これで今年度分の更新はすべて終了といたします。来年も頑張つて行きますので応援よろしくお願いします。

ご意見・ご感想等お待ちしております。では、よいお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4954y/>

ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

2011年12月31日01時50分発行